

# 「子どものターミナル・ケア」 に関する研究 分担研究者 西村 昂 三

## 「総括報告書」

本年度の研究は、

- ①臨死患児の心理的特徴はいかなるものか。
- ②その心理的特徴をとらえたターミナル・ケア（在宅と施設内にわけて）のあり方はいかなるものか。

とのリサーチ・クエスチョンを設定して行われた。

## 「研究成果」

臨死患児、とくに年長児の心理的特徴を調査したが、診療開始時から患児の性格を十分に把握し、心理的配慮を継続的に提供しながら周囲との信頼関係の樹立につとめることが必要であり、いわゆるトータル・ケアを欠かせないことが判明した。

在宅ターミナル・ケアを行なうには、両親の希望と理解と協力が必要で、さらに地域の開業医師と保健婦の協力体制の樹立なしには行いがたい。

また、在宅ターミナル・ケアのコスト面の資料を作成した。実際在宅ターミナル・ケアを行なった患児について「セコム」と「日本在宅看護システム」の2社の料金表によるコストと健保のコストを比較したところ、健保料金の低コストが目立った。これは訪問時間が長くなるにつれ、またいろいろの手技を行なうほどその差が目立ち、こどもの在宅ターミナル・ケアの普及には先ず健保料金面の大幅な改訂が強く望まれた。

また、保健婦によるこどもの在宅ターミナ

ル・ケアに対する訪問看護の実情を知るため全国主要地域の市町村・保健所の保健婦を対象にアンケート調査をしたところ、回答のあった85機関、465人の保健婦のうち32機関、57人の保健婦がこどもの在宅ターミナル・ケアに関与したと回答した。即ち、既に現場ではかなりの数の保健婦がこどもの在宅ターミナル・ケアに従事しており、今後研修の普及と地域の医療福祉機関との連携を密にすることにより、さらにこどものターミナル・ケアが改善充実されるものと思われた。

ターミナル期に到達した患児はできるだけ在宅で過ごさせるにこしたことはないが、身体障害や疼痛、呼吸困難、出血などの末期症状のため施設内ケアも必要になることが稀ではなかった。しかし、この施設内ケアを少しでも減らし、在宅ケアに近いケアをするためには、院外宿泊施設の全国的規模の設置とその利用、さらにデイ・ケア制度の導入が強く望まれた。

また、在宅ターミナル・ケアを行なった家族に対する調査では、患児のみならず、その両親・家族にとっても在宅ターミナル・ケアはきわめて有意義なことが判明した。

今後の課題として

1. 小児の在宅ターミナル・ケアの指針の作成
2. 患児と家族の院外宿泊施設の全国的規模の設定とデイ・ケア